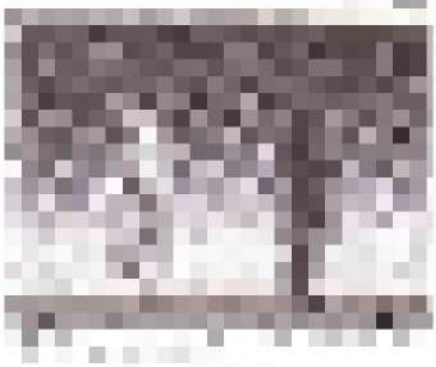
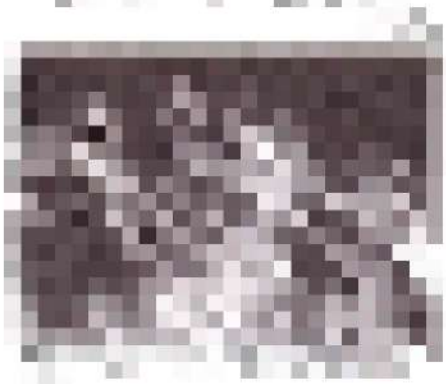




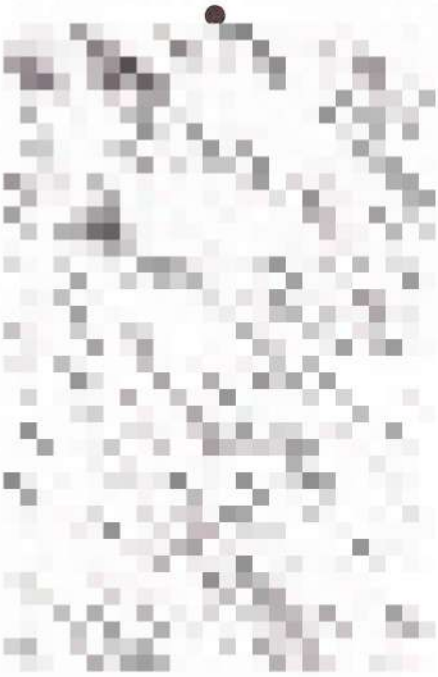
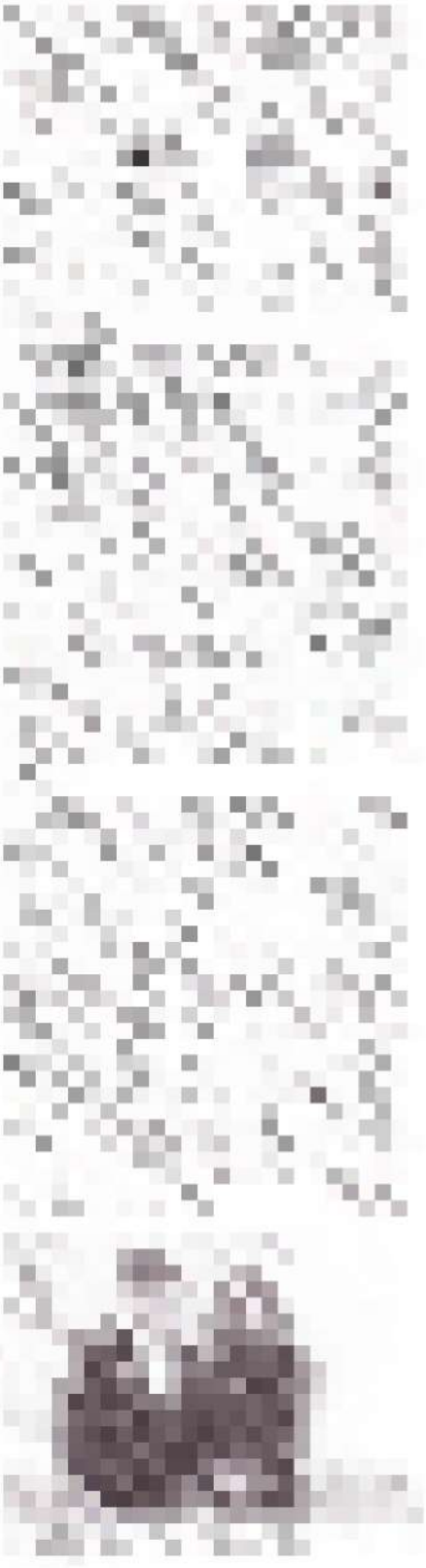
Concert フローレスがモーツァルトの非公開収録コンサート

「今まであまり縁がなかった」というモーツァルトを、ソニー移籍後初のCDで録音したファン・ディエゴ・フローレスが、次にライヴ・コンサートのDVDを出すということで、11月17日、ミュンヘンのクヴィリエ劇場での非公開収録コンサートに赴いた。演奏はリッカルド・ミナージ指揮ラ・シンテイッラ。

冒頭に《コジ・ファン・トゥッテ》の〈愛の息吹〉を置いたのには驚いたが、案の定、居場所を探しているような不安定な出だしとなったものの、後半は興味深い装飾音で飾り 、軽やかなベルカン

Scramble Shot

ト唱法に逃げず、じっくりとモーツァルトのレガートと対峙して、今宵の色合いが決まった。2曲目の《牧人の王》(羊飼いの王様)のアリアでは、前奏から王の血筋の雰囲気を醸し出し、輝かしい音と勇ましい音楽、完璧な高音で本領発揮した。

続く《ドン・ジョヴァンニ》からの2曲のアリアでは、こんなドン・オッターヴィオが登場したら、このオペラは成立しないと心配になるほど男気のあるアプローチで、客席の満足感も頂点に達した。前半最後の《後宮からの逃走》も、発音に難はあるものの、理解するには十分なドイツ語で、立派なベルモンテを聴かせた。

休憩後はオペラのようにドラマティックだったコンサート・アリア《あたりに吹きかうそよ風よ》K.431、リマ時代に初めて歌ったという《皇帝ティートの慈悲》での完璧なテクニック、愛情深い《魔笛》のタミーノ、そしてすべてを備えたヴィルトゥオーゾの《イドメネオ》でプログラムを終えた後も、アンコールとして不安定だった曲を繰り返す余力を見せた。DVD発売が楽しみだ。　(中 東生)